

令和 3 年 5 月 17 日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00359

研究課題名（和文）文学を通じて見る中華民国期における軍閥の存在感と影響力についての研究

研究課題名（英文）The Presence and Influence of the Military Cliques in the Period of the Republic of China through Literature

研究代表者

中 裕史（NAKA, Hiroshi）

南山大学・外国語学部・教授

研究者番号：10227720

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中華民国期の四川省における軍閥の存在感と影響力を、文学の視座から明らかにしようと試みたものである。四川作家の周文、李劫人、田聞一の軍閥を扱った作品を丹念に読み込んで、語りの特徴や登場人物の描写、歴史的事実の反映などの諸側面について分析を行った。その結果として、周文は人物形象の対比によって権力者に対する諷刺を際立たせていること、李劫人は市民の視点から軍閥に対する評価を行っているが、同時に市民を評価する視点も持っていること、田聞一は演義体の語りを用いて軍閥を主役とした物語を構成していることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中華民国期の軍閥についての、文学の立場からの研究は多くはない。また、出生地を同じくする作家群について、個別の作家研究は見られても、一つの総体としてとらえてその個性を見出そうとする研究も多くない。本研究は、文学が中華民国期に大きな存在感と影響力をもっていた軍閥を、文学がどのように評価したのかを考察する上で、四川という地域に注目して、四川作家という群体がどのような叙述を行っているのかを明らかにした点で意義があるといえる。

研究成果の概要（英文）： This study attempts to clarify the presence and influence of warlords in Sichuan Province during the Republic of China from a literary perspective. I carefully read works dealing with the warlords of Sichuan writers Zhou Wen, Li Jieren, and Tian Wenyi, and analyzed various aspects such as the characteristics of the narrative, the depiction of the characters, and the reflection of historical facts. The results are as follows: Zhou Wen emphasizes the satire of those in power by contrasting human figures, and Li Jieren is evaluating the warlords from the perspective of the citizens, but at the same time he also has the perspective of evaluating the citizens. Tian Wenyi uses the narrative of the historical romance to compose a story with a warlord as the main character.

研究分野：中国現代文学

キーワード：中華民国 四川 軍閥 評価 四川作家 語り 人物形象 読者

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

中華民国期の四川においては、規模の異なるさまざまな軍閥が省内各地に割拠して互いに勢力を競い合い、さながら中国全体の縮図のような状況を呈していた。中華民国期では軍閥の趨勢が中国の動向を決定していたといっても間違いではないほど、軍閥の影響力は大きかった。華北では北洋軍閥の諸軍や東北軍閥が互いにしのぎを削る中で、幾度となく北京政府の勢力地図が塗り替えられた。規模こそ異なるものの、四川でもこれと似通った状況がおこっていた。同盟会系や北洋軍閥系、そして土着の軍閥が時に対立し、時に連合して自らの勢力拡大を図った。こうした軍閥が消長を繰り返す中で、四川の動向が定まって行ったのである。

中華民国期の四川における軍隊あるいは軍隊をとりまく諸状況については、四川における大小さまざまな軍閥の角逐をたどった匡珊吉・楊光彦の研究(1991)や、軍閥の根拠地となっていた防区の形成を論じた呉光駿の研究(2011)などによって、軍閥の崛起と隆盛、そして滅亡の様相を知ることができる。また、軍閥の兵士や経費、糧食などの供給源としての保甲制については冉綿恵の研究(2010)がある。日本では、四川における軍閥消長の歴史や個別の地域における政治状況に着目して分析を試みた今井駿の研究(2007)や、抗日戦争および内戦期の糧食と兵士の徴発について考察した笹川裕史の研究(2004)などがある。

一方で、文学の立場からなされたまとまった研究は見当たらない。もちろん四川作家についての個別の研究は進んでいて、中国においては、巴金や郭沫若、何其芳のように全国的なレベルで研究が続けられている作家もあれば、李劫人や艾蕪、沙汀のようにおもに四川省レベルで研究が続けられている作家もある。日本でも、巴金や郭沫若についての研究には長い間に蓄積されてきた実績と厚みがある。ただ、作家とその出生地との関連についていえば、作家の経歴や人格形成の面で考察に加えられることはあっても、作品を分析する上での重要な構成要素の一つとして考察の対象になることはなかったといえる。

こうした状況を踏まえて、本研究は、出生地を同じくする一つの総体としての四川作家が、軍閥という対象を叙述するとき、そこに四川作家としての個性を形成する特徴を見出しうるのではないかと考えたところから出発したものである。

2. 研究の目的

本研究は、軍閥混戦の舞台であり、直接にあるいは間接にその影響を承けざるを得なかった四川において、民衆にとって軍閥はどのような存在であったかという「問い」を設定して、中華民国期における軍隊と民衆との関係を、四川作家の作品を手掛かりにして読み解いていくものである。その際に、四川作家を個別の作家の集合体としてではなく、ある整合性をもつ一つの総体としてとらえて、軍隊小説を手掛かりにして、四川文学の特色を明らかにしていくこととした。

本研究を進めることによって、大きく言えば、これまで個別に研究が進められてきた四川作家を、一つの総体として捉えなおして、その特色について解明し、そこからさらに四川という地域の、ほかの地域にはない個性を明らかにしていくことができると考えられる。また、四川作家の丹念に読み進めることによって、これまで見えていなかった作家の個性に光を当てて、新たな一面を掘り起こしていくこともできると期待される。そしてそれを別の四川作家と比較することを通じて、個別の四川作家の特徴をより鮮明に導き出すとともに、総体としての四川作家の特色をより具体的に示すことにつながっていくことになる。

3. 研究の方法

本研究においては、中華民国期の四川作家に着目して、その中でもとりわけ軍隊に取材し、あるいは軍隊に言及している作品を研究の対象とする。いったい、軍隊という存在は国家や民衆にとっては諸刃の剣であって、国家や民衆を救うこともできるが、脅かし滅ぼすこともできるものでもある。本研究では、軍閥混戦の舞台であり、直接にあるいは間接にその影響を受けざるを得なかった四川において、民衆にとって軍閥とはどのような存在であったかという「問い」を設定して、中華民国期における軍隊と民衆との関係を、四川作家の作品を手掛かりにして読み解いていくために、具体的な方法として、まず一定数の作品を発表して全集や文集が刊行されており、かつ軍隊に取材し、言及する作品を発表している作家である李劫人、周文、および田聞一の作品を対象として、これを精読し、中華民国期において軍隊が民衆にとってどのような存在であったかを、作家がどのような立場から、どのような叙述のスタイルによってとらえているのかという点に着目することによって明らかにしようと試みた。四川省の省都である成都に視点を固定して街やそこに暮らす人びとの日常・非日常を語る李劫人、四川省西部からチベットにつながる地域を舞台に作品を書いた周文、清末以降の軍閥の領袖を主要な登場人物とする田聞一の作品を丹念に読み込んで、まずそれぞれの作家の立場と作品で扱っている軍隊の性質、および叙述の特色について分析するとともに、歴史事実の検証も行って作品の背景を確認しながら、作家の独自性に関して考察を行った。

4. 研究成果

本研究を進めるにあたって、まず周文(1907～1952)の中篇小説『在白森鎮』(1937)の叙述に基づいて、四川作家を代表する一人である周文の特色である諷刺の手法について分析するところから着手した。『在白森鎮』は、軍部から地方に派遣されてきた青年が、現地の官僚の角逐に巻き込まれて窮地に立たされる様を、内面描写を多用して活写した小説である。周文は、四川省の西部に位置する西康地域における軍閥支配の状況を背景において、二人の地方官僚を登場させ、それぞれの老獪ぶりを、その言動と内面描写によっていきいきと叙述するとともに、世間知らずの青年が彼らの老獪さに翻弄され、追い詰められていく様子を対比させることによって、独自の諷刺の手法を成立させていることを明らかにした。

続いて、四川省の省都である成都に蟠拠した四川最大の軍閥である劉湘を登場させる田間一（1947～）の長篇小説『成都巷戦 1932』（2006）を対象として、田が軍閥をどのように評価しているのかを分析することとした。その際に、田に先立って、成都における市街戦を回想文のスタイルで叙述した李劫人（1891～1962）の『危城追憶』（1936）と比較検討することとした。李は、市民に密着した語りを採用しつつ、市民の視線から軍閥の非道を批判する一方で、個々の兵士の善良さを仄めかす叙述も配置して、多面的に軍閥を描き出している。これに対して、田は、単純化してとらえた攻守の図式と勇猛ではあるが粗暴な軍人の主役への抜擢によって読者の興味をかきたてる演義体の語りを用いていることが明らかになった。

さらに、劉湘の人となりをクリックアップして叙述した、田間一の長篇小説『混戦 争覇巴蜀』（2007）に基づいて、劉湘個人に対する描写から軍閥をどのように評価しているかをつとめて読み取ることとした。その際に、田の別の長篇小説『霧鎖峨眉 蒋介石謀取四川紀実』（2013）において叙述される劉湘ならびに蒋介石の人物像も参照することとした。田は『成都巷戦』と同じく演義体の語りを採用し、『三国志演義』に登場する読者になじみの深い歴史上の人物のイメージを利用しながら、英雄として、また悲劇の主人公として劉湘の形象を塑像していることが明らかになった。そして劉湘に対するこうした高い評価の背後に田の少年時代の経験が触媒として作用していることも明らかにした。

以上の研究によって、四川を代表する 3 人の作家の個性と叙述の特徴を可視化することができた。ただ、四川作家を総体としてとらえてその四川作家たらしめている所以にまで十分な考察を進めるには今一步至らなかった。この点については、今後の研究課題として継続して取り組んでいきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 中 裕史	4. 巻 第107号
2. 論文標題 成都市街戦の再現－李劫人と田闌－の語り－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『アカデミア』文学・語学編	6. 最初と最後の頁 pp.326-350.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中 裕史	4. 巻 第105号
2. 論文標題 老獯と樸純 周文『在白森鎮』の四川人	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『アカデミア』文学・語学編	6. 最初と最後の頁 pp.211-234.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中 裕史	4. 巻 第109号
2. 論文標題 四川作家による軍閥の評価 田闌『混戦 争覇巴蜀』を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『アカデミア』文学・語学編	6. 最初と最後の頁 pp.348-370.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中 裕史
2. 発表標題 抓壮丁 文学に見る兵士補充の方法
3. 学会等名 現代中国研究会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------